

子どもに心地よい音・音楽表現とメタ認知発達支援 (1) —プロの演奏家による絵本オペラ演奏からの考察—

石上浩美 (京都市立芸術大学大学院)

キーワード：絵本オペラ，保育内容領域表現，メタ認知発達支援

問題と目的

保育 (Childcare) とは、子どもが適切な環境の下で、健康・安全で安定感を持って活動できるように大人が養護するとともに、その心身を健全に発達させるように働きかけることである (石上, 2019)。また、村井 (1988) は、子どもは生まれながらに「善さ」を持っているだけではなく「善くならう」としている存在であるという (Figure 1)。

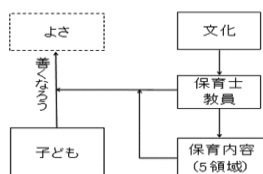


Figure 1 「善さ」をふまえた保育観 (村井, 1988 を基に作成)

一方、平成 29 年 3 月幼稚園教育要領等の改訂にともない、「幼稚園教育において育みたい資質・能力および幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿 (以下 10 の姿)」が示された。これは、方向目標としてとらえるべきものであるが、今後保育現場における計画や実践が「10 の姿」ととられ、子どもの自由な表現を制約するのではないか、という懸念もある。

そこで本研究では、子どもに心地よい音・音楽表現とはどのようなものなのか、それが子どものメタ認知発達支援とどのように結びつくのかを明らかにするために、音楽表現活動 (絵本オペラ) に焦点をあてた調査・分析を行った。

方 法

絵本オペラ活動の概要：既存の絵本作品を基に、独自作曲した楽曲を、打楽器・ピアノ・歌によって演奏しながら、独創的な絵本の物語を展開する。1 公演あたり 45 分程度。本研究では内田麟太郎・隆矢なな作「ともだちや」を題材とした。

調査時期：2017 年 2 月～2018 年 3 月 (計 5 回)

調査対象・データ：絵本オペラ活動動画記録、演奏者への半構造化面接法個別インタビュー。インタビューデータは IC レコーダーで録音し、逐語記録を作成した。その後、発話群を抽出、音声的な抑揚や間を加筆したテキストとし、質的コード化の技法 (Coffey & Atkinson, 1996 ; メイナード, 1993), および質的分析ソフト (IBM SPSS Text Analytics for Surveys) で分類・分析した。

結果と考察

大まかなインタビュー項目は、1) 活動のきっかけ、2) 活動の継続・普及・啓発、3) 活動の社会的意義の 3 点である。以下、紙面の都合上、演奏者 (代表) インタビューデータの一部を示す。

【「絵本オペラ」活動のきっかけについて】

長年クラシック音楽の専門家として、大規模なコンサートホールなど、音響設備・環境の整ったところで演奏会を行っていましたが、子どもには入場制限などもあります。このような状況に対して、「なぜ、子どもが楽しめる質の高い音楽の場が少ないのか」、「どうすれば大人も子どもも日常生活の中で自然に心地よさを感じることができる、音楽の場づくりができるのか」という、素朴な問いが生まれました。そこで先生方と相談しながら始めたのが、この「絵本オペラ」公演活動です。

【「絵本オペラ」活動の継続・普及・啓発について】

この活動は、まもなく通算 150 回を迎えます。営利目的ではなく、宣伝もほとんどしていませんが、先生方の口コミなどで自然と広がっていき、今に至ります。子どもさんは、目の前で繰り広げられている「音楽と物語の世界」を食い入るように見つめ、大声で笑ったり歌ったり演奏者の動きに同期したり模倣したりします。すると、こちら側 (演奏者) ももっと子どもたちを喜ばせたい、楽しませたい、よい演奏にしたいという想いが強くなります。その場にいる子どもと大人が、「音楽と物語の世界」に触れ、楽しみ、音楽の世界の心地よさを感じているようです。ただ、一番楽しんでいるのは実は私たち (演奏者) かもしれません。

【「絵本オペラ」活動の社会的意義について】

(演奏者と聴き手による) 双方向性のあるやりとりによって、ただ楽しかった、面白かったというだけではない何かがあるような気がします。そのきっかけが、いわゆる「音楽のちから」であり「言葉の力」なのかもしれません。質の高い音楽表現が、心地よさを創り出す原動力となり、子どもが生まれながらに持っている「感性」が研ぎ澄まされていくような気がします。このような活動を地道に続けることが、これからの音楽教育のあり方や課題を改善することにつながることを期待したいです。